

茜色の歌姫



第五部 法隆寺炎上



法隆寺（奈良県斑鳩町）

是の冬に、（中略）斑鳩寺に災けり。（中略）一屋も余ること無し。大雨ふり雷震る。

（『日本書紀』卷第二十八）

天皇、臥病したまひて、痛みたまふこと甚し。ここに、蘇我臣安麻呂を遣して、東宮を召して大殿に引き入る。（中略）天皇、東宮に勅して鴻業を授く。乃辞讓びて曰はく、「（中略）願

はくは、陛下、天下を挙げて皇后に附せたまへ。仍、大友皇子を立てて、儲君としたまへ。臣は、今日出家して、陛下の為に、功德を修はむ」とまうしたまふ。天皇、聴したまふ。即日そのひに出家して法服のりのころもをきたまふ。(中略) 或の曰(い)はく、「虎に翼を着けて放てり」といふ。

『日本書紀』卷第二十八)

第二章 近江の怪事 668～669

伊勢より東にある尾の国は、代々、小子部ちいさこべを名乗る豪族が宰領してきた。この頃、小子部の長の名は鈿鉤さいこうという。

海が深く切れ込み、魚市あゆちがた潟と呼ばれる砂浜が、延々と続いている。潮が引けば、ところどころに広大な干潟ひがたが現れ、そこに迷い込んだ魚介とまやを採る漁人の苦屋とまやが並んでいた。

そのなかに、新たに建てられた苦屋が一つ、遠くから来た若い男女が住まいし始めてから十日ばかりが経とうとしていた。

いづくより来た者どもぞ、と訝いぶかしがる漁人もいた。男は、色黒く、魚介を採るにも巧みであり、同じ漁人とすぐに知れた。しかし女は……。色白く、美しい面差しは、上つ方かみに生まれ育った者のそれであった。やがて、小子部の長おきに縁ゆかりのある者どもと伝わってきた。わけがあるのであろう、容喙ようがいはすまいぞ。漁人どもはそう申し合わせたように口を噤んだ。

秋のある暖かな朝。

魚を日に干し、冬籠もりの備えに忙しく働いていた漁人どもは、不意に、かの女に声をかけられ、驚き、貌を見合った。

「吾われが夫せが、未だ還かえってこない」

おし黙る漁人どもを、強張こわばった面差しで見つめ、女は続けた。

「誰ぞ、見たものはないか」

どこか権高な口振りであった。漁人どもは訝しげに互いを見やるばかりで、応えなかった。
「吾は見た」

と声をあげたのは、まだ幼い男童であった。

「男と二人、山へ向かった」

「山へ？」

女は、男童につかみかかるばかりに詰めより、問うた。

「誰と？」

「知らぬ。剣を持っていた」

女はしばし黙し、やがて山に向かって駆けた。

漁人どもが「山」と呼んでいるのは、湿地や川の多い広々と続く平野に、ぽつんと盛り上がった小高い丘のことである。樹が生い茂り、昼なお暗い。

女は、髪を振り乱して駆けた。行き会う人々に問い、「夫」と剣を帯びた男が「山」へ入ったことを確かめた。民が持てる刃物は、未だ石で造られている。剣を帯びているはずがない。とすれば、いずくの伴部か。小子部の伴部ならば、まず、彼女を訪なうはず。何故に山へ？ 人目のつかぬところで、何をなさんというのか。そもそも、剣を帯びた男は何者？ 飛鳥、あるいは近江より来たった……。

山に入り、道なき道に踏み入り、覆い被さる枝を払いつつ進んでいった女は、やがて、草を踏みしめた跡を見つけた。明らかに人が、それも二人、歩いた跡であった。それを追って進むうち、

かすかに血の匂いが漂ってきた。こみあげる胸騒ぎを抑え、身構えつつ足音を忍ばせた。やがて窪地が見えた。窪地の底に、「夫」が仰向けに倒れていた。

「繩虫！」

女は「夫」の名を叫び、窪地へ降りた。喉を掻き切られて絶命していた繩虫を揺すぶり、はつと貌を上げてあたりを見回した。

繩虫の屍から、さらに足跡が続いていた。彼を殺した者に相違ない。唇を噛みしめ、足を踏み出したとき、不意に下の地面が崩れた。土埃が舞い、したたかに総身を打った。

痛みに一瞬、吾を忘れ、気を取り戻して見ると、人がひとり入れるほどの穴に落ちていた。深く穿たれた穴の縁は、手を伸ばしても届かない。立ち上がろうとして、鋭い痛みに呻いた。右の足首が挫けていた。

「つつがなきや」

頭上で声がした。見上げると、穴の縁に、粗末な衣を纏い、腰に剣を提げた男が覗き込んでいた。丸い貌に、細い眼、薄い唇、低い鼻、醜くも酷薄げな面差し。男は嘲るように笑みつつ拝礼した。

「讚良皇女よ」

女——讚良皇女は、歯噛みしつつも、息を整え、考えを巡らせた。

男の貌に見覚えはない。一月前、讚良皇女の行方を探る者がいるとの報せを受け、それまで潜んでいた尾の国の北なる濃の国を宰領する多品治の邸に、六歳になった草壁皇子を預け、小子部

鈿鉤の元に逃れた。多も小子部も、ともに大海人皇子と親しい。追つ手が次に、小子部を探ることとは明らかだった。皇女は、小子部に仕える漁人の縄虫とともに、海辺の苦屋に暮らし始めた。穴の縁に立つ男こそ、おそらく近江の意を受けて、讃良を探っていた者に違いない。

「吾は、漁人が妻」

讃良皇女は言った。

「何故、かような仕様をなすぞ？」

「皇女は吾を覚えておられまいが」

男は、喉を鳴らして笑った。

「吾は、筑紫にて皇女を見た」

讃良皇女は口を噤んだ。男は続けた。

「宝大王に随い、大官の方々が筑紫に赴いた折り、皇女を見た」

「皇女と知っていて、何故の狼藉ぞ」

「命を受けた故」

「誰の命ぞ」

「言えぬ」

「天皇の詔か！」

「知らぬ」

「何故に、縄虫を殺した」

皇女は声を震わせた。縄虫は、寡黙で木訥な男であった。細やかに、皇女に仕えた。

「妨げとなる故」

「何の妨げぞ」

「まず、皇女を姦す」

男は、醜く貌を歪めて言った。

「しかる後に殺す」

讃良皇女の面差しから血の気が引いた。総身が冷え、細かい震えが止まらなかつた。男は続けた。

「殺した後、皇女の屍を河辺宮に運び奉る」

「何故……」

やっとしわがれた声を振り絞った。

「河辺宮へ……」

「吾の知るところではない。命ぜられたことをなすのみ」

「ならば」

讃良皇女は、喚き、諦めたように眼を閉じ、背を穴の壁にもたせかけた。

「疾う、姦せ」

「皇女は、かつて多治比皇子を死に至らしめた」

男は坐し、傍らの麻袋を引き寄せた。

「今の皇女を姦し奉ろうとすれば、吾が身も危うい。しばしその穴にいます。皇女が飢え、渴き、弱りたもうて後に、姦し奉る」

男は麻袋から、竹筒を取り出し、呑んだ。
「水も食もある。吾は、ここで待つ。皇女が弱りたもうのを、待つ」

その頃……。

海辺では、讚良皇女に、繩虫が「剣を帯びた男」とともに「山」へ向かったと告げた男童が、母親の袖を掴んで叫んでいた。

「手のない女が、山に向かっていた」

忙しく網を繕っていた母親は、煩わしげに男童を追いやった。男童はなおも喚いた。

「手のない女が、山に向かった。手がなかった」

日は沖天に昇った。讚良皇女の落ちた穴に、日の光が樹々をかき分けてまっすぐに差し込んできた。

その日、朝から何も口にしていなかった皇女は、激しい渴きに襲われた。

「水が欲しかろう」

男は、水の入った竹筒を手に、嘲笑いつつ言った。讚良は、男を睨み、応えなかった。

「やがて欲しくなる。一滴の水のために、姦されてもよいと思うようになる」

「こーやって幾人を姦したぞ」

皇女は、低い声音で問うた。

「はて、覚えておらぬ」

「汝が名は」

「耳麻呂」

耳麻呂。すなわち乱を希む中臣金が放った伴部であるが、讚良皇女がそれをしる由もない。

「耳麻呂よ。女を姦し、殺すは、愉しいか」

「愉しい」

「その貌では」

讚良皇女は、声音に嘲りを籠めた。

「まぐおうてくれる女もいまい。それ故、無理強いに姦すしかないであろう」

「然り」

すらりと応えた耳麻呂に、皇女は、さらに嘲った。

「哀れな男よの」

「然り」

耳麻呂は、麻袋から、木の葉に包んだ干し魚を取り出し、頬ばりはじめた。

「力づくでしか女とまぐわえぬ醜い己を、厭うているのである」

「厭うてはいない」

耳麻呂は、骨ごと噛み砕きつつ応えた。

「他の女も、皇女のように吾を罵った。罵られるには、慣れている」

「慕われないと思うことはないか」

「ない」

耳麻呂は、はじめて憎しみを眼に籠め、皇女を見た。

「崇められ、慕われ、手厚く育まれた皇女には分かるまい」
「分からぬ」

皇女は声を励ました。

「崇められ、慕われ、手厚く育まれ、醜くもない吾には、汝が心は分からぬわ」

耳麻呂は、青ざめて立ち上がった。腰の剣に手が掛かった。

仕損じた……。皇女は、貌を強張らせた。抗う力の残るうちに、耳麻呂を怒らせ、姦させようとした。もし、姦さず、殺すとなれば、機はない。耳麻呂の長剣は、皇女を穴から出さずとも、喉までは届く。

耳麻呂は剣を抜いた。冷ややかな眼が、皇女の喉のあたりにまさしく向けられた。皇女は後ずさったが、背後はすぐに土の壁であった。

「赦しを乞え」

耳麻呂が呻くように言い、鋭い切っ先が、皇女の喉に擬せられた。皇女は怯え、慄えた。涙が溢れそうになった。貌を歪めた皇女に、耳麻呂は唇の端を歪めて笑み、さらに繰り返した。

「赦しを乞え」

「乞わぬ！」

皇女は叫んだ。

耳麻呂の貌から笑みが消えた。皇女は眼を瞑った。殺される……。

不意の呻きが皇女の耳に入った。眼を開けると、双の手で己が股間を押さえ、苦しみに貌を歪

め、地に両膝を突いた耳麻呂だった。やがて横倒しに倒れたその背後に、女が立っていた。

皇女は眼を見開き、叫んだ。

「汝は……!!」

黒い粗布を腕を覆ったまま上半身に巻き付け、裾の破れた袴。髪を後頭部ろで束ねて垂らし、その面差しは、かつての美しさを保っている。

「久しく、讚良皇女」

皇女は貌を強張らせ、問うた。

「土蜘蛛の長が、何故にかような地に……」

「もはや長ではない」

女……鏡郎女は、眼を臥せて笑った。

「否、土蜘蛛でもない」

鏡郎女は、しばし待て、と言ひ、穴の縁から離れた。やがて、太い蔦が、穴のなかに投げ入れられた。

皇女はしばし躊躇った。かつて筑紫の朝倉宮で、鏡郎女と葛城皇子が、宝大王を弑殺したのを眼の当たりにした。それ故、皇女は未だ、この東国に逃げ潜んでいる。鏡郎女が、近江の意を受けて、皇女を探りに来たのかもしれない……。

「登れ」

鏡郎女の声がした。

「心安んじよ。汝を殺すか捕らえるかするのならば、この男を害したりはしなかった」

皇女はさらに逡巡し、やがて意を決して垂らされた蔦を掴んだ。挫いた右の足は使わず、左足で土壁を踏みしめ、なんとか穴から這い出した。

耳麻呂は、股間を双の手で押さえ、俯せに倒れたまま、ひたすら悶えていた。起きあがろうともがく度に、痛みが雷のように総身を貫き、ついには気も萎え果て、涙を流して嗚咽するばかりであった。鏡郎女に蹴られたふぐりは、二つながら、半ば裂けていたのだ。

讚良皇女は、憎しみを込めて、耳麻呂の腹部を足蹴にした。耳麻呂は低く呻き、号泣した。

ふと見回すと、鏡郎女は、やや離れた草むらに、両膝を突き、貌を地につけ、犬のように臥せて、草を噛みちぎっていた。やがて貌を上げ、身を起こした。唇が緑の草汁に染まっていた。腕は粗布に覆われたまま立ち上がり、訝しげに見守る皇女に歩み寄り、不意に膝を突き、皇女の挫いた足首に唇を寄せた。

驚く皇女が身を避ける暇もなく、郎女は、口中で噛み砕いた草を、痛む足首に舌で塗りはじめた。傷が発する熱が、次第に冷ややかに鎮まっていた。

「鏡郎女よ」

草の汁を塗りおえて立ち上がった郎女に、皇女は問うた。

「手を使わぬのは……」

「使いたくとも手はない」

郎女は静かに応えた。

「左右ともに、安見娘に切られた」

安見娘に？ さらに問おうとしたとき、鏡郎女は上半身を覆う衣に口を当てた。音を立てて衣が裂かれた。端切を口にくわえ、郎女は膝を突いた。草の汁を塗った皇女の足首に端切を当て、右腕を出して押さえた。確かに、右手は手首から先がなかった。手のない右腕と口を使い、巧みに巻いた。

「何故に」

巻き終えて貌を上げた郎女に、皇女は再び問うた。

「吾を殺さぬ」

「何故に」

郎女は微笑んで問い返した。

「汝を殺さねばならぬ」

「汝は、宝大王を……」

皇女は声を荒げた。

「吾は見た。汝はそれを知り、吾を追うてきたのであるう」

「何故に汝を追わねばならぬ」

「吾が、朝倉宮で汝がなしたことを明かせば、汝は大逆の罪を負い、死を与えられる」

「すでに、死は与えられている」

その言葉に、皇女は鏡郎女の双の手を切ったのが安見娘であることの意を悟った。郎女は嗤笑した。

「それも一興。すでに死んだはずの吾が皇女とともに彼等の前に現れ、ありのままに告げれば、宝大王の弑逆に加担した者ども……天皇も、蘇我も中臣も巨勢も、全て、大逆の罪に問われよう」
笑いをおさめて、郎女は咳いた。

「されど、それをし得るくらいならば、皇女も吾も、かように身を潜めずにすんでいたはず。そうではないか？」

「何が言いたい！」

皇女は叫んだ。

「知りたいか？」

郎女は、静かに言った。

「知りたければ、聞け」

頭上で木の葉がざわめき、鳥が巢から飛び立った。

風が草むらを揺らした。

鏡郎女は、ありのままを語った。新羅の王女として生まれ、花郎どもの策により一族を滅ぼされ、独り逃れた百済の地での豊璋王子との関わり。やがて百済をも追われ、辿り着いた大和の土蜘蛛の里で女どもの長となり、やがて三輪の箸墓へと遷り、大王家の乱れに乗じて政事に深く関わったこと……。

山背皇子の死。蘇我鞍作の死、蘇我石川麻呂の死。策を練ったのは葛城皇子であったが、常に土蜘蛛が加担していた。そして、豊日大王の失墜、有馬皇子の叛逆、宝大王の死は、鏡郎女自ら

が謀った。

「吾はただ、ひたすら新羅の男どもに受けた辱めを雪ぐため、多くの血を流した。ついには三韓に水軍を送り、夥しい兵を、そして、自ら育んだ土蜘蛛の女どもを死なしめた……」

自らを嘲るように、郎女は苦笑った。

「その果てに、かの百済人にも、配下の安見娘にも裏切られ、このごま」

しばし口を嚙み、瞬きもせず凝つと見つめる讀良皇女の眼差しに気づき、再び口を開いた。

「吾は生き延びた。双の手を斬り落とされ、川に流され、それでも生きた。吾は、いずくともしれぬ里人に救われた。匿われ、食と家を与えられ、傷を癒した。その代わり、里の男どもはかわるがわる吾を姦した。食と家を得るため、吾は耐えた。傷癒えた後、その里を出で、諸々の地を彷徨った。食と家を得るため、多くの男に姦されつつ……」

皇女は貌を背けた。哀れみより、怖気で肌が粟だった。

「何故……」

俯いて黙した郎女に、皇女はかすれた声で問うた。

「この地に？」

「この男は……」

鏡郎女は、いまだ地に俯せて苦しみ悶える耳麻呂を見やった。

「中臣金の伴部。四年の前、吾が吉備に至った折り、この男はかの地の豪族の娘を姦し、その屍を門前に棄てた。中臣に逆らうその豪族が、叛乱を起こしてもよし、畏れ随つてもよし、との策であろう。吾は未だ、傷は癒えたれど、未だ心は萎えたままにて、耳麻呂の仕業を憎みつつも、

討つには至らなかつた。三月前、濃の国にて、この男が皇女を捜していることを知った。故に彼を追つて、この地まで来た」

「この男を討つためにか」

「それだけではない」

郎女は、やや眼を臥せ、呶くように言った。

「汝に会うため」

「吾に？」

身構えた皇女に、郎女は首を振った。

「今更、汝の口を塞いで吾に何の益ありや。吾が望むのはただ……」

その時、獣のような咆哮が響いた。悶えていた耳麻呂が立っていた。醜い貌を歪め、齒を食いしばり、股間の激痛に震える膝をやつと支えつつ、長剣を振りかざしている。

咄嗟に、鏡郎女は身を折って地に口を付けた。貌が上げられたとき、唇に礫が銜えられていた。頭を振り、唇から飛び出した礫は、過たず耳麻呂の額を打った。耳麻呂は剣を取り落とし、貌を手で覆ったその時には、鏡郎女は彼の面前に迫り、股間に膝を打ち込んでいた。

耳麻呂は呻き声をあげ、仰け反り、仰向けに倒れた。背が地に叩きつけられた時、鏡郎女は耳麻呂の右の腕に己が双の脚を絡ませ、地に尻をつけていた。脚をねじり、耳麻呂の左腕を折り砕いた。耳麻呂が身を反らせて絶叫した時、鏡郎女は同じように、彼の右腕をも折っていた。腹を激しく上下させて身を振り、泣き喚く耳麻呂を、立ち上がった鏡郎女は冷ややかに見下ろし、ふぐりを目がけ、容赦なく踵を打ち込んだ。耳麻呂は白眼を剥き、血反吐をはいた。もはや叫ぶ

ことも泣くこともできず、痙攣するのみであった。

「吾が希うは……」

双の手を使うことなく、瞬く間に敵をうち倒した早業を、惚けたように見つめる讚良皇女に、

鏡郎女は息ひとつ乱さず、静かに告げた。

「汝とともに、近江の百済人どもを倒すこと」

「百済人を……」

「然り」

鏡郎女は頷いた。

「そして汝が夫を、高御座に即けること」

その数日後。

内裏での政務を終えて邸に戻った中臣金が寝屋に入ると、そこに安見娘が坐していた。思わず叫ぼうとした金を手で制し、安見娘は言った。

「汝が東に派した耳麻呂なる伴部……」

何故それを……。耳麻呂に讚良皇女を追わせた事は、誰にも明かしていない。

「死んだぞ」

金は蒼ざめた。

耳麻呂に皇女を姦させ、殺させ、その屍を河辺宮の門前に棄てさせ、大海人皇子を憤らせ、軍を興させ、叛逆の徒として討つ。この策は、天皇にも、蘇我や巨勢にも、中臣の長たる鎌子にす

ら、諮^{はか}つていない。策が果たせぬまま露わになれば、どのような譴責^{けんせき}が降るか……。金の動揺を察したかのように、安見娘は笑って立ち上がった。

「心安んじよ。耳麻呂の死を知るは、吾のみ」

「何故……それを知る」

「汝の策など、すぐ知れる」

金の肩に手をかけて座らせ、安見娘は続けた。

「四年前、同じ策を、吉備の豪族に使ったことも知っている。下策は下策なれど、万に一つも乱が起これば、それはそれで面白い。されど、耳麻呂は死んだ。どのように死んだかは、吾は知らぬ。尾の国に耳麻呂が現れたと知り、もしやと配下の土蜘蛛に追わせた。その土蜘蛛は、耳麻呂らしき男と、讚良皇女らしき女が山に入ったと聞き、踏み入って探した。耳麻呂は山中に埋められていた。ふぐりを砕かれ、両の眼を抉^{えぐ}られ、左右の腕を折られ、苦しみ抜いて死んだようだ。皇女の行方は分からぬ」

「まさか……皇女が……耳麻呂を……そのように」

「皇女独りの仕業ならば、それはそれでよいのだが……」

安見娘は、笑みを治めて言った。

「誰かが、皇女を助け、耳麻呂をそのように責め殺したのだとすれば、厄介である」

「誰だ、それは！」

「探^{たづ}つてやつてもよいぞ」

縫^{ぬい}るように問う金を冷ややかに見やり、安見娘は言った。

「ならば、その費^{つい}えは、中臣の蔵より出せ」

やがて冬となった。

近江の内裏では、年賀の儀の備えで、舍人^{とねり}や女婦^{にょじゆ}どもが忙しく走り回っていた。やがて、いずくからともなく、悲鳴に似た声が伝わってきた。

七枝^{ななえだ}の剣がない……。

天皇の御稜威^{みしるし}の徴ある七枝の剣を求め、多くの舍人や兵が近江じゆうを駈けた。やがてそれは、淡海のほとりで見つかった。誰が、厳しく衛^{まも}られている蔵から七枝の剣を持ち出したのか、ついに分からなかった。

年が明けた二月、巨勢^{こせ}比等の邸が出火した。三月、蘇我^{そが}赤兄の乗馬が、首を斬り落とされてきた。五月、淡海^{あわうみ}の辺に建てられた高樓^{たかどの}が崩れ落ちた。近江に邸宅を構えた群臣の蔵から、珍宝が次々と盗まれた。さらに奇怪なことに、盗まれた珍宝は、都のあちこちに棄てられていた。

打ち続く奇怪な事どもに、新たに設けられた弾正^{だんじやうたけ}台の官人どもが厳しく詮議^{せんぎ}したが、科人^{とがびと}は捕まらなかった。

……筑紫^{ちくし}で誅^{ちゆう}殺されたはずの鏡郎女^{かがやめ}の仕業ではないか。

その噂は、飛鳥の大海人皇子の耳にも伝わってきた。近江



近江京復元図

にある舎人の置始比等は、蘇我の一族でありながら、不遇をかこつ安麻呂に賄を送り、味方につけていた。

「一方で、讃良皇女ではないか、との噂もある」

蘇我安麻呂は、声を潜めて置始比等に語った。

「いずれも風評でしかないが、殊に、中臣金あたりが、騒いでいる。讃良皇女だけではなく、大海人皇子もまた、加担しているのではないか、と」

置始比等は、安麻呂に絹を献上し、家に戻って子の宇佐伎を飛鳥に派した。

讃良が……。大海人皇子は、信じられぬ面差しであった。

讃良は、昨年の秋、潜んでいた尾国の里から姿を消して以来、皇子にもその行方は伝わっていない。尾の国の小子部をはじめ、伊勢の海部、濃の国の多ら、大海人皇子を慕う豪族どもは、伴部を数多く派して探しているが、杳として知れなかった。

置始宇佐伎は言った。

「天皇には、さような流言は信じたまわぬ御様子。されど、大友皇子は、密かに中臣金らと語り、大海人皇子を討つべしと密かに奏上したまうとの噂」

「大友皇子に同心するは、金の他には誰ぞ」

「蘇我赤兄は、さらなる乱は避けるべきとの意なれど、同族の若い果安などは、しきりと大友皇子の漢詩の宴に侍り、天皇の高御座を継ぐべきは大友皇子と説いているとか。また、巨勢比等も、これに同心しつつある」

「大友皇子、蘇我果安、中臣金、巨勢比等か」

大海人皇子は、独りひとりの貌を思い浮かべつつ頷いた。敵となる者がしだいに明らかになってきた。

「蘇我赤兄が、大友皇子に同心せぬは、吾等にとつては心強い。して、中臣鎌子は？」

「このころは病と称し、邸に籠もり、内裏にも現れぬ故、その意は誰にも分からぬと……」

大海人皇子は、置始宇佐伎を勞い、退らせた。続いて、舎人の村国男依を呼んだ。

「伊勢の海部、尾の小子部、濃の多を訪なえ」

男依は、濃の国の生まれ。それらの豪族とも親しい。頷いた男依に、皇子は低く付け加えた。

「二年か、三年。あるいは一年かも知れぬ。軍乱の兆しがある。密かに兵の備えを勧めるよう、伝えよ」

男依が拝礼して退出した後、皇子は呟いた。

「讃良の仕業とは……あり得る」

とはいえ、讃良独りでなしうるはずもない。誰かが加担している。それは誰か……。

皇子は、脳裡に浮かぶその名を、急いでうち消した。

近江に都が遷つて未だ二年、打ち続く怪事にも関わらず、賑やかに人の行き交う大路を、十三歳の柿本人麻呂は、唇を細かに動かしながら、なにやら呟いていた。

「東の……」

いづくかの豪族に仕える伴部らしき男と、すれ違いざまに肩がぶつかった。

「童、何をする」

怒気を発した伴部は、口を嚙んだ。人麻呂は、旧知の者と出会ったかのような面差しで言った。
「今朝方、東の山の端に日輪が昇り、野の草々を金色の光で染めるのを見た」

呆気にとられて口を開けたままの伴部に、人麻呂は続けた。

「その光を……ただ、光や輝きでは面白くない。何か……あの神さびた景色を表す言葉は……」
うす気味悪げに、伴部は肩を怒らせ、踵を返して去った。人麻呂は不意に叫んだ。

「炎だ！ あの萌えたつような光……野に炎の立つ見えて……これよ、これ！」
大路の彼方より、華やかな装いの官人が馬に鞭打ち駆けてきた。人々が一斉に道の端に寄った。ただ独り、人麻呂のみが、続く言葉を求めて突っ立っていた。

「童、どけ！」

馬上の官人が叫んだ。

「そう、月！」

人麻呂も叫んだ。

「東の空に日輪の炎、西の空には、沈み行く月……」

「どけ、童！」

官人はさらに叫んだ。馬は、人麻呂の間近に迫っていた。しかし、官人は、馬を止めようとはせず、まっすぐに人麻呂めがけて突っ走った。

「かえり見すれば……月……月……」

「人麻呂！」

道の端より、女が飛び出した。人麻呂はやつと貌を上げ、笑みを浮かべて言った。

「額田郎女の君！」

額田郎女は人麻呂を抱きかかえ、道の端に押し倒した。同時に、馬がその傍らを駆け抜けた。

「童！」

馬首を返し、官人が戻ってきた。

「何故に道を空けぬ！」

「赦したまえ！」

額田郎女は、人麻呂を抱きかかえつつ、叫んだ。

「歌となると、何も聞こえず、何も眼に入らぬ童。赦したまえ」

「歌だど？」

官人は馬を止め、凝つと郎女に眼差しを注いだ。齢は二十歳半ばか。太い顎に、瞳の小さな細い眼。馬上から見下ろしつつ、言った。

「この童が作る歌は、漢詩なりや、大和歌なりや」

「大和歌である」

「汝は、額田郎女だな」

あからさまに蔑みを貌に浮かべ、官人は問うた。

「古き大和歌を蒐め、書に遺そうと、益なき業に日を送る額田郎女か」

「汝こそ誰か！」

人麻呂が喚いた。

「人の名を挙げて嘲り、自らは名乗らぬ。非礼である」
「人麻呂！」

きつく嗜めようとした郎女に、官人は馬より降り、歩み寄った。

「吾は、蘇我果安」

蘇我果安……大友皇子と親しく、漢詩の宴に足しげく通うかの果安か。

額田郎女は拝跪した。

「蘇我の方とは知らず、非礼を赦したまえ」

「汝が額田郎女ならば、問いたい」

傲然と見下ろしつつ、蘇我果安は言った。

「近頃、近江にては、出火、盗み、怪事の絶えぬことは知っていよう。誰が、都を騒がしているか、汝は知るや」

「知らず」

笑みを作って首を振る郎女に、果安は言った。

「かつて、土蜘蛛であった額田郎女でも、知らぬか」

「はて」

郎女は首を傾げてみせた。

「土蜘蛛とは……？」

「隠すな。吾は知っている」

果安は勝ち誇って言った。

「大海人皇子のため、多くの血を流した土蜘蛛が、何故に大和歌蒐めなどを専らとする」

「吾がもし、土蜘蛛ならば」

郎女は立ち上がり、凝っと果安を見詰めた。

「今の一言とともに、汝は生きてはいまいよ」

果安は蒼ざめ、後ずさった。郎女は笑みを浮かべ、再び拝跪した。

「土蜘蛛の武とは、かように恐ろしきものとは聞いたことがある。されど……」

右の手を震わせつつ腰に提げた剣の柄にかけた果安を見上げ、額田郎女は静かに言った。

「吾は歌人。歌よりほかに才はなし。それ故、歌を蒐めるのみ」

「郎女、出来た！」

不意に人麻呂が叫んだ。

「東の野に炎の立つ見えて、かえり見すれば、月傾きぬ」

「よき歌！」

郎女は立ち上がり、人麻呂の手を取った。

「後は、漢字で如何に書き記すかを案ぜよ」

「諾」

人麻呂はうつ伏せ、地に指で文字を書き始めた。郎女はその傍らにしゃがみ、愉しげに書かれる文字を見詰めた。

蘇我果安は舌打ちし、馬に乗って駆け去った。

その後姿を一瞥し、郎女は呟いた。

「大友皇子は、近頃の怪事を、大海人皇子の謀（はかりごと）としたのであろう」

「豊璋……、否、今上（きんじょう）の天皇は乱を好まず、唐の風を政事（まつりごと）に取り入れつつも、大和の風をも蔑ろにはせず、それ故、額田郎女が人麻呂をはじめ、歌や文字に通じる者どもを集め、大和歌を書に記すことを赦している。宮を建て、橋を架け、唐や百済の技の見事さを誇示しつつ、大和の歌や舞、慣わしを損ねぬよう、気を配っている。民や臣に無用の不満を起させぬためであろう。」

しかし……、大友皇子は違う。大和の風を蔑み、すべてを唐の風に染めねば気がすまない。その妨げとなっているのが、百済人を戴くことを嫌う中小の豪族どもが慕う大海人皇子である。信じ、蘇我果安のような、己を恃むことの多く、倣岸で粗野な者どもが煽る。

小賢（さか）しらな彼らが、如何な謀を練っているか。天皇は、大海人皇子を討てば、百済人を戴くことに不満を持つ豪族どもが抗うことを知っている。しかし、病がちな天皇に何かあれば、たちまち、軍となるう。

あの大海人皇子が、彼等の謀に備えているかどうか……。近江にある額田郎女が、土蜘蛛として鍛えた技をもつてすれば、彼らの謀を挫くことも、できぬでもない。されど……。

額田郎女は眼差しを伏せ、寂しげに呟いた。

「頼まれもせぬに、助けるのは、飽いた」

背を丸めて地に文字を連ねる柿本人麻呂を見やりつつ、額田郎女は悲しげに貌を歪めた。

乙女であった頃より睦み、一度は、共に戦おうと言いつつ合った大海人皇子とは交わりを絶った。

皇子との間になした十市皇女は、未だに吾を赦していない。

吾には、歌しかない。人麻呂のような才ある者を歌人として育む他は、何もない。

「皇子よ」

大友皇子の宮の庭の亭（あずまや）に、蘇我果安は喚いた。

「やはり、額田郎女は大海人皇子のため、土蜘蛛の技をもつて、都を騒がせおる」

「果安よ。そのこと、如何に証かす」

茶の入った椀を口に運びつつ、大友皇子は問うた。

「父なる天皇は、何かと額田郎女を眞贋（まご）にする。確かな証かしかもなく、郎女を罪には問えぬ」

「されば……」

果安は拝跪した。

「何とぞ、吾を彈正台の長官に任じたまえ。必ず、証かしを見出し奉る」

彈正台は、官人を監察し、都の安寧を司る役。官制を唐風に改めつつあるなか、新たに設けられた。

「急くな、果安」

皇子は窘めた。彈正台が設けられてまだ二月。今の長官をすぐに罷免するわけにはいかない。

「彈正台には、額田郎女から眼を離さぬよう、吾より伝えておく」

不満げに退出する果安の背を眺めつつ、大友皇子は不快げに貌を顰めた。悪い男ではないが、皇子たる者への礼が足らぬ。否、臣として当然行われるべき礼の作法が、まだまだ薄い。この弊風は改めねば……。

舎人が現れ、中臣金が訪なってきたと告げた。皇子は頷き、命じた。

「こゝへ」

やがて現れた中臣金を見やり、皇子は再び眉をひそめた。金の傍らに、安見娘が並んで拝跪していた。臣下たる中臣鎌子の妻にすぎぬ者が、赦しもなく皇子の宮に現れる。そもそも、身分ある女がみだりに外を出歩くことすら、皇子の知る人倫に背くことであった。やむを得ず外に出るときは、笠で貌を隠すべきなのに、この国の女どもは、堂々と白日に己を晒して闊歩する。

「中臣鎌子が妻の訪ないがあるとは、聞いていなかった」

皇子は、不快の意をあらさまにした。

「皇子よ、お赦しあれ」

中臣金は、地に額をつけて謝した。

「されど、このごろ、都を騒がせる怪事につき、奏上したく……」

「その事と、鎌子が妻と、如何な関わりやある」

「御存知のとおり、鎌子が妻は、土蜘蛛を宰領する者」

「また、土蜘蛛か」

大友皇子は、溜め息を吐いた。

「蘇我果安も言うた。かつて土蜘蛛であった額田郎女こそ、怪事の科人に相違なし、と」

「額田郎女が？」

金は思わず振り向き、安見娘を見た。安見娘は膝を突いたまま、眼を臥せている。

「さしたる証かしくもなく、額田郎女を罰するわけにもゆかぬ。そもそも、都の安寧を司るは弾正台。いちいち、吾が指図を仰がずとも、何か報せがあらば、弾正台へと伝えよ」

「皇子よ」

安見娘は、眼を臥せたまま、静かに言った。

「弾正台では、科人を挙げることなど、できぬ」

声を荒げようとした皇子を制するがごとく、安見娘は言葉が続けた。

「確かに、近頃の怪事、そのやりようを見るに、土蜘蛛の技を身につけた者の所業のようにも思える」

安見娘は膝を進めた。

「それ故にこそ、吾等土蜘蛛を用いようとは、何故なしたまわぬ」

貌を上げ、まっすぐに皇子を見つめるその眼差しに、ややたじろぎつつ、皇子は応えた。

「汝等が、是非にも科人を挙げたいと望むならば、吾は、止めぬ」

「されば……」

安見娘は、唇の端を歪めて笑った。

「吾等がやりようにて、勝手に探すぶんには、咎めたまわぬ、と」

「然り」

皇子は苛立ち、貌を背けた。安見娘は拝礼し、身を起こして踵を返そうとして、ふと、呟くように言った。

「吾等のやりようは、手荒いぞ」

そのまま、安見娘は去った。残った金に、大友皇子は言った。

「鎌子が妻は、土蜘蛛のやりようは手荒い、と言うたな」

額く金に、皇子は問うた。

「どのように、手荒いのか」

「即ち……」

金は逡巡し、やっと言った。

「事をして遂げるためには、人を殺め、傷つけることも厭わず、狙われて逃げおおせた者はいない、と……」

「たかが女どもの武、防ぎようもあるう」

「土蜘蛛の武は、向き合つて剣を交わすようなものではなく、深夜、密かに寢屋に忍び、音も立てずに敵を死に至らしめる、そのようなものと」

「音も立てずに？」

皇子は問うた。

「如何ようにして」

「されば……」

金は額から汗を垂らし、俯いて応えた。

「男のふぐりを砕き、死にいたらしめ、たとえ生きながらえても、もはや廃れ人も同じ。気は萎え、四肢は力を失い、やがて衰えて死ぬ、と」

皇子は青ざめた。しばし唇を震わせて黙っていたが、やがて口を開いた。

「他に用がなければ、退がれ」

金が去つた後、皇子は独り、呟いた。

この件が終われば、必ず、土蜘蛛の女ども、悉く誅殺しよう。

安見娘も、そして額田郎女も……。

女が、武で男を制する。そんな世があつてよいはずはない。

その頃、内裏の奥、天皇の寢屋を、中臣鎌子が訪なつた。

天皇は、まとも病床にあつた。唐風の寢台に横たわり、絹を幾重にも重ね、皺の増えた面差しは蒼白く、口を出る言葉も弱々しかった。

「吾はもともと、ひよわな質」

天皇は苦笑つた。

「百済の使としてこの国に至つてより、似合わぬ政務に疲れが重なつた。もはや、長くもあるまいよ」

鎌子は、余計な慰めなど口にはしなかつた。百済人の天皇を戴くことへの、民や豪族どもの不満、さらには、ひたすら大和の風を嫌い、唐や百済の風を押しつけようとする大友皇子やその側近どもの先走りを抑えるため、どれだけ心を配ってきたか、その心配りがどれだけ心身を蝕むものか、鎌子は知っていた。

天皇は、舍人や女孀どもを退らせ、寢台に坐して言った。

「汝にのみ諮る。他には漏らすな」

鎌子は頷いた。

「もし今、吾がみまかれれば、天皇の高御座を継がせるべきは、誰ぞ」

「唐や百済の法や理を以てすれば大友皇子」
鎌子は応えた。

「されど、中小の豪族どもや民どもは、得心すまい」

唐や三韓では、皇帝や王の位は、もつとも年長の男子が継ぐべきものと定まっている。母の貴賤、齢を問わず、父から子へ、血のつながりが重じられる。

「大和の大王の御位は、兄弟であれ、子であれ、大王家のうちより、齢を重ねて政務に熟知し、また、国を統べるべき資質ある者を選ぶが慣わし。男子に、それに適う者がいざれば、皇女が大王となった。大友皇子は未だ若年、この地へ至ってからの日も短く、高御座に即くに相応しい御方とは、見なされまい」

「大和の大王ではなく……」

天皇は苦く微笑んで問うた。

「日本の天皇であつてもか」

鎌子は頷いた。天皇は続けた。

「かつて大和では、大王位を継がせるにあたり、確とした定めなきが故、高御座をめぐって争いが起きた。ここで大和の旧弊を続ければ、さらなる乱れの基となるう」

「然り」

「されば、大友皇子に継がせることにより、日本の天皇は、代々、父から長子に継がせるものと今、定めねば、後の世に禍を残すことになるのではないか」

「されど今、大友皇子に御位を継がせたまえば、これもまた、乱の基」

大海人皇子と、皇子を崇める中小の豪族どもが、必ず軍を興す。鎌子はそう口にはしなかつたが、その意は天皇にも通じていた。

「されば……」

天皇は問うた。

「如何なる策やある」

「ここ一年、あるいは二年のうちに、天皇が崩御したまうその折りは……」

鎌子は重く口を開いた。

「まずは、倭媛皇后をこそ、天皇となしたまうが上策」

「皇后に？」

天皇は驚いて問うた。

「何故、皇后を」

「大和の大王家にも先例あること故、ひとまず、乱は避けられよう。また、皇后は亡き古人皇子の皇女、すなわち、大和を開きし飯豊大王の裔なれば、未だ二十半ばの齢なれど、少なくとも大友皇子よりは、民は得心し奉ろう」

天皇は黙して耳を傾け、鎌子は続けた。

「ただし、皇后が高御座にありたまうは、大友皇子が長ずるまでのこと。大友皇子は、臣下の最上位にて政事を執り行い、民や中小の豪族を次第に得心させてゆくがよいかと」

口を噤んだ鎌子を、天皇は促した。

「その策、続きがあるう」

鎌子は、わずかに睫をしばたいた。

「大海人皇子は、如何する」

「しばらくは、しかるべき要職に就かせ、機を見て、手を打つべきかと」
「手を打つとは？」

鎌子は応えなかった。天皇は凝つと見つめた。鎌子は眼を臥せたまま、かすかにも面差しを動かさなかった。

やがて天皇は口を開いた。

「まずは、倭媛皇后を、高御座に即けるべく、手を打とう」

かすかに頷いた鎌子に、天皇は問うた。

「皇后の祖おやのうち、もつとも民に崇められている大王は誰ぞ」

「飯豊大王をのぞけば、大王の御位みくらひには即きたまわねど、厨戸皇子うまやどのみこ」

「厨戸皇子の建こんりゆう立した寺が、いづくかにあつたな」

「斑鳩いかるがの地に」

天皇は頷き、言った。

「病が癒えれば、斑鳩の寺に御幸みゆきする」